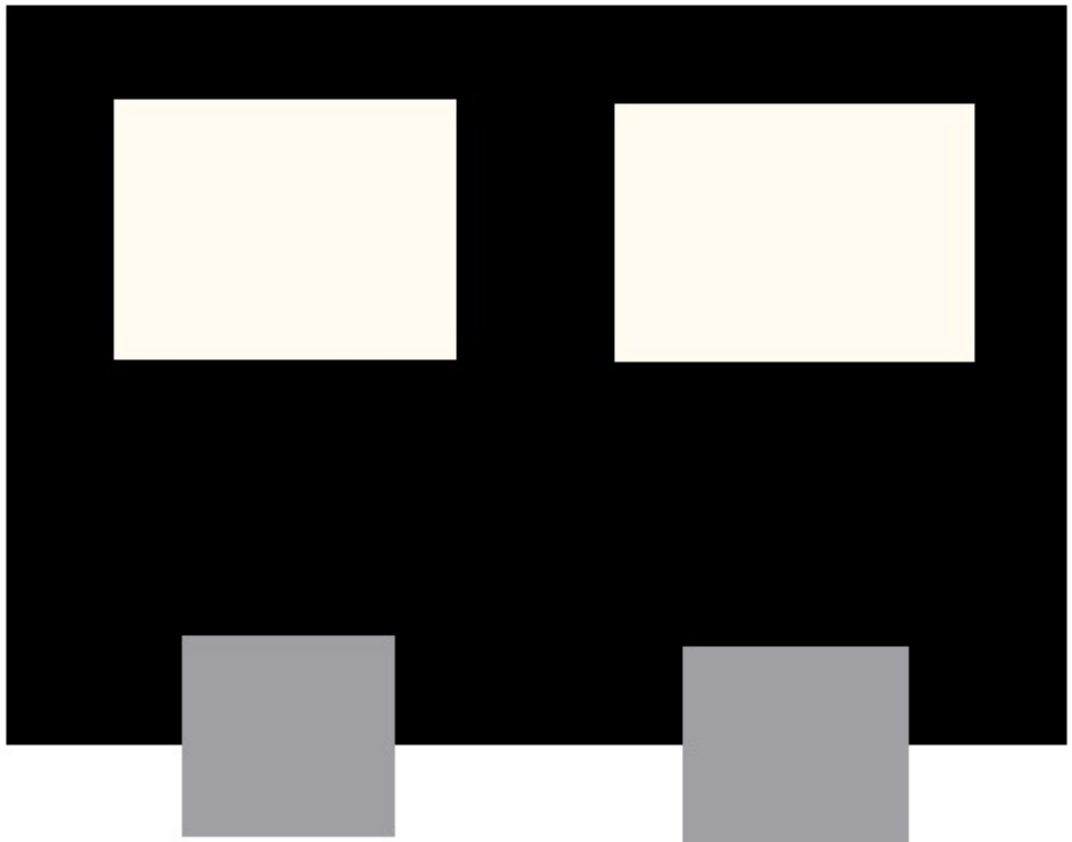


Common Coed

4



留学生シャリー・アグレルは、「蛍雪中学校」の校門を通ったところで、一人の少年から声をかけられた。

ちょうど下校時刻の頃である。

言い直せばシャリーは、通っている中学校からの帰りがけに、校門で少年に話しかけられた、ということである。

「よ。一人か、お姫様」

少年の第一声はこれだった。

シャリーの知っている少年である。

柊勇。シャリーの同級生だった。

「柊くん。なにかご用ですか？」

「あー……なんつーか、あれだ。一緒に帰らない？」

「私が歩くのにあなたが着いてくる分には、私は咎め立てしません」

シャリーはそう言い、歩く。

「お前って無愛想な奴だよな」

勇は、シャリーの横に並んで歩きながら言った。

「よく知らない殿方に愛想を振りまく必要性がないだけです」

「確かに、女子と話してる時は、結構、愛嬌があるな」

「私も日本の女子中学生の生態ぐらいは知っていますから。彼女らに冷淡にして嫌われたくもありません」

「……お姫様ってのはみんなこうなのかい」

シャリーは東欧の小国、リービツヒの王女である。

とある危険を避けるために緊急疎開的な意味で日本に「留学」してきた。その危険はすでに排除されているのだが、どうせなら留学を続けたいという本人の意向によって、彼女は日本に留まり続けていた。

「お姫様という単一の性格があるわけじゃありませんから。私は私です」

「まあいいや。なあ、シャリー。お前、町はずれの幽霊屋敷、知ってるか？」

「クラスで噂になってますね。誰もいないはずの廃屋から、最近、夜な夜な人の声がするという」

「そうそう、それがお化けだっていうんだよ」

「ええ。くだらない噂ですが、それがどうかしました？」

「正体を確かめてみないか？」

「それは、私と一緒にそこに探検にでも行きたい、ということですか」

「まあ、そうなるな」

「小学生じゃあるまいし。いいですか、我々は、昔のこの国の男性が元服したような年齢なんですよ」

「げんぶく？」

「今でいうなら成人。大人になるってことです」

「ああ、そうか。そうだったかな」

「そんな年になるというのに、お化け屋敷の探検だなんて、あまりにも子供じみてます」

「昔は昔、今は今だろ。……ああ、お前、怖いのか」

「怖い？」

「お化けが怖いんだろ」

「バカにしないでください、そんなものをこの私が……」

シャリーは顔を真っ赤にして言った。

実のところ、「その手」の存在は得意ではない。

「だったら、いいじゃん。大人の年齢だって言うなら、子供のやるようなくらいできるだろ」

こうなると、シャリーの気性として引くに引けない。

「いいでしょう。行ってあげます」

「よし。今度の土曜の朝八時な。迎えに行くから」

勇はそう言って手をたたくと、跳ねるように去って行った。

「へえ、なるほど。彼氏が出来てよかったわねえ」

ランニング姿の一人の女子大生が、爪を切りながら言った。

「彼氏とか、そういうのじゃないです」

シャリーが頬を膨れさせる。

彼女は今、とあるアパートの四畳半一間の部屋に座っていた。

目の前で爪を切っているのは、この部屋の主である一条恵である。

恵とシャリーは、同じアパートに住んでいる上、部屋が隣同士である。

それ以外にも理由があって、二人はかなり親しかった。

互いの部屋にしょっちゅう上がりあうような間柄である。

「でもシャリー、あっちはそのつもりよ、多分」

「ごめんです。そういうことなら、断ります」

「それをやったら、クラスでチキン扱いね。あんたへの称号は、「リービツヒのお姫様」じゃなくて、「お化け屋敷が怖いシャリーちゃん」になるわよ」

「称号とかそんなのはどうでもいいですけど……」

シャリーは弱った。

臆病者扱いはされたくないのだ。

「そうになると、どっちに転んでもダメじゃないですか」

「ま、ね。その勇って奴、それを狙ったとしたらなかなかの策士だわ」

「勇くんがそんなの、ありえませんよ」

「そうなの？」

「小学生みたいな子なんですよ。授業中にも、消しゴムや鉛筆を使ってゲームごっこをしてるような子で」

「中学でそれは豪傑ね」

「だから、そんな子が私に策略なんてありえません」

「でも、あんたはその子の言うことを聞かなきゃいけないってのは確かじゃない」

「……うー」

「ま、一回だけつきあってあげなさい。あとは堅く口止めしとくことね。しゃべったら口利いてやんないって言えば、黙るわよ」

「そうでしょうか」

「間違いなし」

一条恵は、確信を持った口調で言った。

夜。

宝石店の入り口から飛び出したニッキー・デボンは、店の前に停車してあったワゴン車の助手席に飛び乗った。

そして、すでに座っていた運転手に、

「出せ」

と命じる。

ワゴン車は、夜の町を勢いよく走り出す。

後部座席から、太い女の声がした。

「よく出来たかい、坊や？」

「ばっちりさ。この国の通貨にして一億は下らないね」

「流石、私の坊やだね。一流の宝石泥棒だ」

「えへへ」

パトカーのサイレン音が聞こえてくる。

宝石店の店員が通報したのか、あるいは宝石店の警報装置が作動したせいかで、警察にニッキーたちの存在が通報されたのだろう。

「ママ、どうしよう」

「……………そこの細い路地を左に曲がりな」

女の声は運転手に命じ、運転手はそれに従う。

「え？ この先にもあれを作っておいたの？」

「私のやることにぬかりがあるもんかい、坊や。この町は、もはや私らへの宝石供給所だよ」

その晩、宝石店の強盗犯をパトカーで追跡していた警察官たちは、細い路地の突き当たりで、強盗犯を見失った。

行き止まりのはずの路地に入り込んだにも関わらず、ワゴン車は、きれいさっぱりどこかに消え失せてしまったのである。

「あんな大きなワゴン車が、どこに消えたのかまったく分からない。……………疲れてたんでしょか」

と、運転していた巡査は上司に話したという。

日曜日になった。

シャリー・アグレルは、朝の六時に目を覚まし、シャワーを浴び、服を着替えた。出来るだけ動きやすい服装を心がけた。

朝食をすませてしばらく経つと、朝の七時四十分になっていた。

シャリーは部屋から出て、ドアに鍵をかけた。

「彼氏との待ち合わせまで、まだ二十分あるわよ」

と、聞きなれた声がシャリーに話しかけた。

一条恵である。

「遅くなって、彼を家の中に入れてはいたくないだけですっ。恵さんこそ、休日なのにずいぶん早起きじゃないですか。いつもだったらお昼まで寝てるのに」

「あんたの彼氏の顔を見たくなくて」

十分後、その彼氏――柊勇が、シャリーの部屋のドアまでやってきた。

「おはよう！ 行こうぜ！」

元気よく言う。

「おはようございます」

シャリーが言い、

「おはよう」

恵も続く。

「……こちらは？」

見知らぬ女に挨拶されて面食らったのか、勇がシャリーに聞いた。

それにはシャリーは答えず、恵が、

「私是一条恵。シャリーの隣の部屋の住民で、言うなれば日本でのこいつの保護者ってところかな」

「へえ。……おはようございます」

「じゃ、お二人さん。ゆっくりしてきてね」

恵はそう言うと、自分の部屋へと去っていく。

「へへ。お二人さんか」

勇がまんざらでもなさげに言う。

シャリーはそれとは対照的に不機嫌に歩きだした。

「さっさと行きますよ、柊くん！」

町外れの幽霊屋敷は、シャリーの住まうアパートから歩いて三十分ばかりの場所にあった。

あちらこちらに穴が空いた、二階建ての洋館である。

高い塀に囲まれていた。

「な、出そうな感じだろ？」

と、勇が言った。

「自慢のように言われても困りますけど」

「そりゃそうだけど」

「で？ どちらから入るおつもりですか？」

屋敷の正門は閉じ、鍵がかけられている。

元の持ち主が、立ち去る際に鍵をかけたのだろう。

扉の高さは三メートルはあり、道具もなしに乗り越えるのは、少なくともシャリーと勇には難しく思えた。

「入り口はちゃんと調べてあるんだよ。ついてきな」

勇は歩きだした。

シャリーもそれについていく。

勇は、塀沿いに歩く。

二回ほど角を曲がる。

屋敷の裏側に当たる壁を歩いているうちに、一個の穴が空いているのが見つかった。

直径一メートルほどの大きさである。

「ここからなら入れるだろ？」

「かもしれませぬね」

「現に出入りしたことがあるんだ。見てろよ」

勇はかがんで、穴に頭を突っ込み、通り抜ける。

シャリーも後続く。

「きゃっ……」

頭をつっこんだ途端、シャリーは声をあげてしまった。

穴の向こうには、大量の草が茂っていたからだ。

シャリーは草をかき分けながら、先に進んだ。

草の林を抜けると、そこに勇が立っていた。

「こちら側から見ると、草に隠されているんですね、この穴」

「そういうこと。だから、この家の持ち主も穴には気づかないってわけだ。……持ち主がいたとしても、だけど」

と、勇は笑う。

「じゃ、屋敷の中に入ろうぜ」

「なにか入る当てでも？」

「ないけど、こんなボロ家なら、屋敷にも一つや二つは穴が空いてるんじゃないかねえの。もしくは割れた窓とか」

勇は歩き出す。

二人は屋敷の外側を見て回った。

五分ばかり経ったところで、勇が言った。

「穴や割れ窓なんか探さなくてすむぜ」

屋敷の一階の窓の一つが、開けっ放しになっていた。

「あそこから出入りする方が、あなたが当初想定されていた方法よりは楽そうですね」

「その通り」

勇はそう言うと、開け放しの窓まで歩き、窓枠につかまり、中に飛び込んだ。

飛び込んだ後、窓から顔を出し、シャリーに言う。

「お前も入って来いよ、持ち上げてやるぜ」

「手助けなんていりません」

シャリーは窓枠につかまり、勇と同じように中に飛び込もうとした。

が、うまくいかない。

窓枠の位置が意外に高いこともあり、彼女の身長と腕力では、思うように自分の体を持ち上げられない。

「無理すんなよ」

見かねた勇が、シャリーの腕をつかみ、引き上げる。

それによってようやく、シャリーは窓の中へと入り込むことに成功した。

「……一応、ありがとうございます」

屋敷の中に着地した後、シャリーは勇に言った。

二人が入り込んだ部屋は、殺風景な狭い部屋だった。

部屋の隅に置かれた本棚ぐらいしか調度品はない。

勇が、本棚に近づいて、収納されている本の内の一冊を取り出し、開いて読み出す。

が、すぐに、

「よく分かんねえ」

と、放り出した。

シャリーはそれを拾い、少し読んで、

「初歩の機械工学についての参考書ですね。難しいものじゃありませんよ」

「機械工学とか、よく知らねえし」

「これは入門書ですから、事前知識は無関係です。理解する意欲と地頭の問題」

「そりゃ、俺は頭よくねえけど」

と、勇はふてくされた。

「本を読みに来たわけじゃないんでしょう？ 先に進みましょう」

シャリーは言った。

部屋の外には長い廊下が続いていた。

その廊下に沿うように行儀よく、木製のドアがいくつも並んでいる。

「同じようなドアばかりだな。どこから入れればいいんだろ」

「どれでもいいじゃないですか。私たちは別に、確たる目的があってここに来たというわけじゃない」

「そりゃそうだけだよ」

シャリーは勇を置いて廊下を歩き、適当なドアのノブに手をかけた。

ドアノブを回そうとする。

しかし、回らない。

「どうしたんだよ」

シャリーの後をついて歩いてきていた勇が、いぶかしんで言った。

「開かないんです」

「立てつけが悪くなってんじゃねえの」

勇はシャリーをどかすと、彼女に代わってドアノブを回そうとした。

しかし結果は同じである。

「こりゃ、鍵がかかってるな。他のドアにしようぜ」

「でも、このドア、気になりませんか？ 鍵がかかってるっていうのが逆に興味を引くというか」

「確かに」

「体当たりでもしてみてくださいよ」

「おいおい」

「ドア自体はオンボロみたいですから、案外それで外れるかもしれませんよ」

「でも、一応はちゃんとしたドアだぜ」

勇はどうも、ドアを突き破る自信がないようだった。

「……柊くんって、思ったよりもひ弱い方なんですね。私の隣の部屋の一条恵さんなんて、高級ホテルのドアを一蹴りで破壊したことがあるんですよ」

「どういう状況だよ、それは」

「色々あったんです。とにかく、一介の女子大生である恵さんがホテルのドアを壊せるのに、中学生とはいえ殿方である勇くんがこんな廃屋のドアも壊せないなんて、正直に言ってあまりにも情けないと思います」

「……見てろよ」

シャリーの言葉に流石にプライドをくすぐられたのか、勇は、深呼吸をした後、アメフトのタックルのような要領でドアに突進した。

ガキャン、という大きな音と共に、ドアは破壊され、勇は転んだ。

破壊されたドアの向こうにあった部屋は、意外なほど綺麗だった。

廃屋の一室ではなく、ごく普通の家屋にある部屋だと考えても、清潔と言えるぐらいである。

もっとも、シャリーと勇の目を引いたのは、その清潔さではない。

部屋の中央に置いてある、一台の黒いワゴン車である。

ワゴン車は、エンジンをかければすぐにでも動き出しそうだった。

「これ、この屋敷の主人が置いてったのかな」

「とてもそうは思えませんが」

そんなことを言いながら、二人はワゴン車に近づいた。

「やっぱり新しいよなあ、これ」

勇はワゴン車のボディをさすりながら言う。

「確かに、何年も放っておかれたとか、そういう風には見えませんね」

「でも、こんな部屋に置いておいたら、すぐに使うことなんて出来やしねえぜ」

勇がそう言ったところで、ドアの方から声がした。

「それでもないんだよ、坊や」

大人の男の、しかし甲高い声だった。

シャリーと勇は子の方を振り向いた。

金髪の男が立っている。

手にはショットガンを持ち、口には棒つきのキャンディーをくわえている。

「手を上げなよ」

二人は言われるままにした。

「どこから入り込んだい？」 なんだい

「えっと...その.....」

男の問いに、勇はしどろもどろになる。

それを横目に、シャリーは言った。

「こんな穴だらけの家、その気になればどこからでも入れます。それよりも、今仰った「そうでもない」を教えてくださいたいですね」

男は、シャリーの度胸のよさに、多少、面食らったようだった。

問われるままにしゃべりだす。

「.....この部屋には、ちょっとしたからくりがあるんだよ」

男は部屋の壁に取り付けてあるレバーを引いた。

外側の壁が、シャッターのごとく上がっていく。

「このレバーを引けば、外に出入り出来るってわけだよ」

と、男は言った。

「この部屋が車庫代わりというわけですか」

「そう、そう」

「車庫になっているのはこの部屋だけ？」

「他にも五部屋くらいはあるよ。つまり車も五台だね」

「こんな家を車庫代わりにして、一体、どんな得があるんでしょう」

「そりゃあ、ぼくたちは宝石泥棒だから、こういう人目につかない屋敷をアジトに……」

男はそこまで言って、「あっ」と叫んだ後、口を押さえた。

シャリーはその隙を見逃さず、男の足下に突進する。

「うわっ！」

シャリーと男は、ともにどうと床に倒れる。

勇は呆然とそれを眺めている。

シャリーは叫んだ。

「逃げて、勇くん！ 助けを呼んできて」

勇はうなずいて、走り出す。

シャリーと男は、しばらく、床の上で押しあいへしあいをしたが、腕力では勝負にならない。

数分後、シャリーは、男によって組みしかれていた。

「女の子なんかが、このぼく、ニッキー・デボンに逆らおうなんて生意気なんだよ」

男——ニッキーはそう言って、シャリーの頬を叩いた。

そして続ける。

「ママに相談して、うんときついおしおきをしてやるぞ」

柊勇は、塀に空いた穴から幽霊屋敷を抜け出、必死で町を走った。

走り、あるアパートへとたどり着いた。

すなわち、シャリー・アグレルが住処とするあのアパートである。

階段を駆け上り、二階のとある部屋のドアを叩いた。

それは、シャリーの隣の部屋――あ的一条恵という女子大生の部屋のドアだった。

どん、どんと叩いていると、乱暴にドアが開かれた。

「やかましい！」

不機嫌な顔の、ねぼけまなこの一条恵が現れた。

勇はそんな恵に向かって叫んだ。

「助けてくれ！ シャリーが危ない！」

「……どーいうことよ？」

「なるほど。幽霊屋敷の住民は、幽霊じゃなかったってわけ」

勇の話聞き終わって、恵は言った。

「うん。なんだか、宝石泥棒だとかなんとか言ってたんだ。俺も、そんなに細かく話を聞いたってわけじゃないけど」

「にしても、あんた、シャリーに助けをもらうなんて、みっともない彼氏ねえ」

「……俺だって気にしてらい。でも、ショットガンなんか突きつけられたら、誰だってあわてるぜ」

「シャリーは慌てない。多分、私も」

勇は黙って、うつむいた。

「別にあんたを責めたいわけじゃないのよ。私とシャリーがおかしいのかもしんない。ま、それはともかく」

恵はこぼんと息をついた。

「その屋敷に案内して。シャリーを助けなきゃ」

恵と勇は屋敷へと走った。

外壁を回り、例の通り穴へとたどり着く。

「この穴？」

恵が、穴を指して言った。

「うん。でも、恵さん入れるかなあ」

「失礼ね。これに通らないほど太っちゃいないわよ」

恵はそう言うと、かがみこんで、穴に頭をつっこんだ。

穴の向こうに生い茂る草むらをかき分け、どんとんと体を入れていく。

「わっ」

恵の尻が、穴につっかえた。

「……大丈夫？」

「これぐらいは、気合いでなんとか……ぬん！」

恵は力を込めて、つっかかった尻を穴から引き抜いた。

尻はぽんと抜けた。

ほどなく、恵の全身が、屋敷の敷地内へと入り込んだ。

「で、屋敷の中にはどう入ったの？」

穴を抜けてきた勇に、恵が聞いた。

「ちょっと行った先に、開けっ放しのドアがあったんだ。でも、今も開いてるかなあ」

「ま、とりあえず、案内してよ」

「うん」

二人は忍び足で庭を歩いた。

やがて、開きっぱなしの一つの窓を見つけた。

「あの窓？」

「うん、間違いないぜ。あそこからシャリーを引き上げてやったんだ」

「へえ、つまり手をつないだってわけ」

「……結果的にはそういうことになるな」

「内心じゃやったって思ったんじゃない」

「そ、そんなこと、ねえよ」

勇は歩き出す。

が、恵はその肩をつかみ、止めた。

「なんだい」

「隠れましょ」

恵は勇の肩を引いて、近場にあった茂みに身を隠した。

「急にこんなところに隠れて、どうしようってんだ」

「人が来たわ。北の方から足音が聞こえたの」

勇はそう言われ、茂みの中から北を見た。

北にある角から、一人の太った女が姿を現した。

のしのしと歩いている。

そのすぐ後ろに、金髪の男がついてきていた。

男はキャンディーをしゃぶっている。

「女相撲の大横綱ってどこね」

恵が感想をのべた。

大横綱はそんな論評は知る由もなく、歩きながらキャンディーの男に言った。

「あの小娘はどうしてるのかしら、坊や？」

「言われた通り、二階の東のはしっこの部屋に置いてあるよ。縛って転がしてある」

と、キャンディーの男が答えた。

「よしよし。じゃあ、なにを放そうかね。どの動物でいじめてやろうか」

「ねずみがいいな。ぼくにやらせてよ」

「やる気マンマンだねえ。ニッキー坊やの捕まえた獲物なんだから、坊やにやってもらう方がいいかねえ」

「じゃあ、いいんだね、ママ」

「ああ、ねずみに噛ませておやり」

ここで会話は終わった。

正確には、恵たちの隠れている茂みからでは、二人の会話が聞き取れなくなったのだ。

太った女とキャンディーの男は、恵たちのいる茂みを歩き去り、来たのとは別の角を曲がっていったのである。

「小娘ってシャリーのことかしら？」

恵は聞いた。

「間違いないと思う。シャリーと俺を捕まえたのは、あのキャンディーをなめてた男だぜ」

「となると、急いだ方がいいわね」

恵は茂みから飛び出した。

恵と勇は、例の窓から屋敷の中に飛び込んだ。

そして、慎重かつ素早い足取りで廊下を歩く。

廊下には人の気配はない。

「二階にいるのかな」

恵の後ろを歩きながら勇が言った。

「あるいは気配を隠す達人の集まり、とかね」

「そんなわけあるかよ」

「でも、宝石泥棒なんでしょ？ それだったら、そういうのは得意中の得……」

恵はそう言いながら、振り向いた。

そして、

「どいて」

と言って勇を乱暴にどかす。

どかされた拍子に勇が後ろを向くと、背後から、ナイフを持った一人の男が迫っていた。

恵は、男に向かって走り、顔面にパンチを見舞う。

男は鈍い声の悲鳴を上げて倒れた。

「私が言ったのが正しかったわね？」

と、恵は勇を見ながらほほえんだ。

階段を捜し当て、上った。

二階の東の端まで歩く。

ドアがあった。

恵は躊躇なくドアノブに手をかけた。

鍵はかかっておらず、ぎいと音を立てながらドアが開く。

部屋の中央に、縛り上げられたシャリー・アグレルが転がっていた。

すぐそばに、キャンディーをくわえた白人の男が立っている。

その手にはねずみが満載されたカゴがあった。

「うわ、きも」

恵が言った。

「そういう言い方、ねずみさんに失礼ですよ」

こう言ったのは、縛り上げられたシャリーである。

「元気そうで安心したわ、シャリー」

「お、おまえ、何者だ？」

キャンディーの男が、口からつばを飛ばしながら言った。

「あんたらがいじめようとしてたそいつの保護者よ」

「ぼ、ぼくにかなうと思ってるのか？」

「やる気だって言うなら、相手になるわよ」

恵が一步、男の方へと近づいた。

男はねずみのカゴを床に下ろし、構える。

「ぼくはアス・コーヤマの道場でカラテを習ってるんだ。黒帯だぜ」

恵は答えない。

黙ったまま歩き、男との距離を詰める。

やがて、お互いの距離が一、五メートルほどになったところで、恵は歩くのをやめた。

「どうした？ かかってこいよ」

男はパンチを宙に打ち、挑発する。

恵は動かない。

何秒かが経った。

男がしびれを切らし、きえと叫びながら恵に飛びかかる。

恵はそれを刹那でかわし、男の腹に膝蹴りを喰らわせた。

男は「あい……」とつぶやき倒れた。

「さて、勇くん」

恵は、部屋の入り口で状況の推移を眺めていた勇に声をかけた。

「ガールフレンドの縄を解いてやって」

勇は慌ててシャリーの方に駆け、その縄を解き始めた。

縄を解かれたシャリーは、勇に

「ありがとう」

と言いながら立ち上がる。

そして恵に、

「まあ、さすがってところです」

と言う。

恵は肩をすくめる。

そして言った。

「とにかく、こんなところに長居はしていらんないわ。さっさとおうちに帰りましょう」

恵はくるりとドアの方へと向きを変えた。

—ドアはなかった。

いや、存在自体はしているのだが、出入り口としての機能を有さなくなっていた。

百貫デブとしか形容できないほど太った一人の女が、ドアを塞ぎ、立ちはだかっていたからだ

。

デブ女の顔には憎しみが燃えていた。

「あんたたちかい、私のかわいいかわいいニッキーぼうやをいじめてくれたのは」

怒りに声を震わせて、女は言った。

「ニッキーて、この男のこと？」

恵は言いながら、床に倒れている男を指した。

「その通りだよ。このマリー・デボンの息子、ニッキー・デボンさ。そいつをよくもいじめてくれたね」

「いじめるもなにも、そもそも、この人が私をいじめようとしてたんじゃないですか」

シャリーがそう反論した。

「シャラップ！」

マリーは叫んだ。

「ぼうやがそっちの金髪のカキにしようとしたのは仕置きだよ。別のものさ。とにかく……」

ずしんと足音を響かせて、歩き始めた。

「あんたたち、一人たりとも生かしちゃおかないよ」

マリーの速度が上がる。

ずし、ずしと部屋が揺れる。

恵は小声で、シャリーと勇に言った。

「私が戦う。あんたらは逃げる」

「恵さんはどうすんだ？」

勇が言った。

「行ければ、後から行くわ」

マリーが突進してきた。

恵はマリーの向かって左側に跳び、シャリーと勇は右側に逃げた。

マリーは恵に突進を続ける。

勇は、その様を呆然と見ていた。

が、シャリーはすぐにそれを咎める。

「逃げましょう」

と、勇の手を引いた。

シャリーと勇は、部屋を逃げ去る。

マリーは、恵に突進しつつもそれを見ながら、言った。

「ガキどもを逃がすためにあんたは犠牲ってわけかい。けなげだね」

「感動的でしょ？」

「ああ」

マリーの三度目の突進がかまされた。

恵はまたも間一髪でかわしたが、によきと伸び出したマリーの右手に、片手をつかまれた。

「まずっ……！」

マリーは恵の体を軽々とふりまわし、壁に向かって投げつける。

恵は、強烈なショックと共に壁にたたきつけられ、崩れ落ちる。

「くそ……」

恵はなんとか体に力を込め、よろよろと立ち上がった。

が、立ち上がった時には、すでに眼前にマリーの巨体がある。

「おやすみ」

マリーはそう言い、恵の顔面に強烈な張り手を放つ。

恵は吹っ飛び、意識を失った。

他方、シャリーと勇である。

二人は、屋敷の中をがむしゃらに逃げていた。

しかし、屋敷のところどころに、マリーの手下と思しき男たちの姿があり、なかなか、屋敷の外に逃げ出すというわけにはいかない。

人目を避けて進む内、二人は、いつのまにやら、廊下の行き止まりにある狭い物置へと追い込まれてしまっていた。

「ど、どうしよう？」

勇がおどおどと言った。

「まったく。あなたときたら、本当に情けない人ですね」

「だ、だってさあ」

「ふう」

シャリーはわざとらしくため息をつき、きょろきょろと辺りを見回した。

やがて、天井に、一個の四角い枠があることに気がつく。

「あれはなんでしょう？」

シャリーは枠を指した。

「天井裏かなんかの入り口だろ」

「じゃあ、あそこに行きましょう」

「……よっしゃ」

勇はそう言うと、物置の中から椅子を見繕って取り出し、枠の真下の床の上に置いた。

勇は椅子に乗り、枠に囲まれた部分の天井板を押した。

板はすっと外れ、天井裏へと続く道が姿を現す。

「よし、オーケーだ。でも、おまえ、一人で上へ登れるか？」

そう言われ、シャリーは少し迷ったが、やがて、

「持ち上げてくださいます？」

と、不承不承言った。

「ん……」

恵は、椅子の上で目を覚ました。

体は縄で椅子に縛りつけられている。

恵がいるのは、暗く、なにもない部屋だった。

恵と、その座っている椅子と、二つを結びつける縄の他は、なに一つ物が置いていない。

窓はなく、ドアは閉まっている。

「なんなのよ、ここは」

と、恵は言ってみた。

ぞっとしない予感が、背中を走っている。

どこからか声が聞こえた。

「お目覚めかい、お嬢ちゃん」

マリー・デボンの声だった。

「ええ。さわやかなもんよ」

「そりゃあよかった。今度からはケンカを売る相手は選ぶこったね。……さて、クイズだ」

「なによ」

「その部屋で、これからお嬢ちゃんに起こることはなんでしょう？」

「処刑的ななにか」

「そりゃ当然さね。クイズの中身は処刑の内容だよ」

「ガスでも入れる？」

「それも面白いけど、違うね。答えは水さ」

マリーがそう言うと同時に、壁の一つに穴が空き、そこからちょぼちょぼと水が流れ入ってきた。

「なるほどね」

「すこーしずつにしといてやったからね、長いこと水泳が楽しめると思うよ」

「そりゃありがたいわ。私、得意だしね」

「喜んでもらえてうれしいよ。じゃあ、私はあとで、あんたが死んでからそっちに伺わせてもらうからね」

声が切れた。

「やれやれ」

恵は、腕に渾身の力を込めてみた。

しかし、縄は解けない。

「まいったなあ」

恵は目をつぶった。

覚悟はついている。

しかし、助かる方法を考えるのをやめようとも思わない。

とにかく、幸か不幸か、水が流れ入るのは非常にゆっくりである。

考える時間だけはいくらでもある。

恵は、目をつぶったまま、まずは心を落ち着けようと考えた。

闇の中で心を落ち着ける内に、がた、ごと、がさという音が上からすることに気がついた。

恵は目を開き、上を見た。

音は、天井の裏側から発生しているようだった。

恵はなんとなく予感がし、

「ちょっと、上のゴキブリさん。私、ちょっと考えごとしてるの。静かにしててくれない？」

と、言ってみた。

すると、半ば予期した通りに、

「……相変わらず失礼な人ですね」

という、シャリー・アグレルの声が返ってきた。

「ああ、やっぱりそこにいたの。ねえ。天井裏からこっちに来れない？」

「うーん……勇くん、なんとか出来ませんか？」

「やれるだけ、やってみるぜ」

天井裏から、先ほどよりもひときわ大きい、ばたん、どたんという音が聞こえ始める。

やがて、天井の板の一つがぱかりと外れ、一人の少年が落ちてくる。

少年はぼしゃんと水の中に墜落した。

が、すぐに、

「いててて」

と、立ち上がる。

水はまだ、少年、すなわち柊勇の膝ほどの高さまでしか流入していなかった。

「大丈夫かい、恵さん」

勇はそう言いながら、恵の縄を解いた。

「さてと。ここからどう出ようかな」

「ドアを破ってみる？」

勇が言った。

「私を水責めにしようとしたってことは、この部屋の壁やドアは相当丈夫でしょう」

「じゃあ、どうすんだよ」

「そりゃ、あんた……ええと……」

「待てばいいんじゃないですか」

天井裏から、シャリーが言った。

「どうせ放っておけば、そのまま水が貯まるでしょう。そうなってから、泳いで穴から出ればいいんですよ」

「……それが一番楽そうね」

数十分の後、一条恵と柊勇は、水に満たされた部屋から天井裏へと脱出した。

「よっぽど私をゆっくり殺すつもりだったのね、あのおばはん」

天井裏に抜け出ながら、恵が言った。

三人は暗く狭い天井裏を這って進んだ。

勝手を知らない屋敷のしかも先の見えない中となると勘で進むしかないのだが、しかし、勘で進む内に、三人は一つの話し声が、下から聞こえるのに行き当たった。

「それで、その女がいなかったってんですかい」

聞き覚えのない男の声だった。

「そうなんだ。そろそろ死んだ頃だろうと思ってママと僕が、水の引かせた後の部屋を見に行ったら、影も形もなくなってる。一体、どうやって逃げたんだろう」

こちらの声には恵たちは聞き覚えがあった。

恵が叩き伏せた男、ニッキー・デボンである。

ニッキーは甲高い声で続ける。

「とにかく、屋敷の外に逃げ出すのはそんなに簡単じゃないはずだ。僕はこの辺りを探す。お前は向こうを探せ」

「はっ」

走る足音がした。

ニッキーと話していた男が、どこかへと去っていったようである。

「下はあいつ一人かな」

と、勇が小声で言った。

「だったら、いいんだけどね」

恵が答える。

「おびきよせてみましょうよ」

シャリーが言った。

「おびきよせるったって、どうすんのよ」

「音を立てます」

シャリーはこんこんと、強く天井を叩いた。

「んん？」

下から、ニッキーの怪訝な声をした。

「音がした？ おかしいぞ。ねずみでもいるのかな」

シャリーがまた叩いた。

先ほどよりもさらに強く。

「ねずみが動き回ってる程度で、こんな大きな音が鳴るってのもおかしい話だなあ……」

と、ニッキーの怪訝な声が更に続いた。

下でがたがたと音が何度も鳴る。

三人はそれに耳をすませた。

「一応、僕の目で確かめてみるか」

金属製のなにかが、床に置かれた音がした。

おそらくは脚立かなにかだろう。

ほどなく、三人のいる天井裏へと続く天井板の一つが、ぱたりと外れた。

下からの光が天井裏に入り込む

「恵さん」

シャリーに言われ、恵は、光の方へと急いで這った。

ニッキー・デボンが天井裏に頭を出したのと、這った一条恵がその眼前まで近づいたのは、ほとんど同時だった。

ニッキーは、

「わ……」

と声を上げようとしたが、言い終わる前に、恵がその口をふさいで、天井裏へとその身を引き上げた。

恵は、天井裏の奥までニッキーを引きずると、口だけは解放してやる。が、ニッキーが話し出すよりもすばやく、

「しっ」

と言い、更に、

「私たちの作戦に協力してもらおうわよ。あんた、ここで殺されるみたいなことは好きじゃないタイプでしょ」

ニッキーは何度もうなずいた。

恵とシャリーと勇は、悠然と地上――と言っては語弊がある。正確には屋敷の床の上に――へと降りた。

ニッキー・デボンも一緒である。

ただし、その首根っこは恵につかまれている。

「やっぱり、ねずみはともかく人間様には天井裏は似合わないわ」

と、恵が言った。

勇はうなずき、シャリーも、

「特に私のような高級な出自の美少女にはね」

と言った。

もちろん、おそらくは冗談ではない。

恵はそれに苦笑しつつ、ニッキーに、

「台所に案内して」

と言った。

「おいおい。屋敷から出たいんじゃないのかい」

「その前にお腹が空いちゃった。詫び料として食事くらいはさせてもらうわ」

台所に着いた。

食べかけの食事や洗っていない皿が散乱した、狭く汚い台所である。

「うちのキッチンよりひでえや」

勇が言った。

「狭さはともかく、汚れは私の部屋のキッチンよりもひどいですね。言うまでもないですが」

シャリーが言った。

「私の台所より……いやなんでもない」

恵は言葉を濁した。

「あら？ 恵さんの台所は、ここと大差ないんですか」

シャリーが言った。

「あんたは分かってんでしょ。しょっちゅうウチに来てるんですが」

「それもそうでした。……そうですね、そういう身で判断させていただくなら、ここと恵さんの部屋の台所ならば、僅差ながらこのの方がわずかにかたづい……」

「冷蔵庫に案内して！」

恵は、ニッキーに叫んだ。

ニッキーは言われるままに歩き、冷蔵庫を開ける。

ぎゅうぎゅうにハムやソーセージや果物や酒が入っており、食べるものには事欠かない。

恵たちは、それぞれに食べ物を取り出して腹の中に放り込んだ。

食べ終わった後、恵は、

「ついでにこれももらってくわ」

と、流しに置きっぱなしになっていた出刃包丁を手に持った。

そして、ニッキーの首に突きつける。

「おい、やめてくれよお」

ニッキーは半泣きになって言った。

「だってあんたは人質だもん。この方が分かりやすいし、いざという時刺せるじゃない」

恵は平然と言った。

それを見ながら、勇はシャリーに、

「いざとなったら本当に刺すのかな」

とささやいた。

「意外と刺さないんじゃないですか」

シャリーが答えた。

「恵さんは、あれでも思ったよりは優しいんです」

「お前なら？」

勇が聞いた。

「刺しますよ」

シャリーは平然と言う。

恵たちは、ニッキーに案内させ、出口へと進んだ。

すなわち、正門目指して歩いたのである。

十数分歩くうちに、一行は正門へとたどり着いた。

「げっ」

正門の様子を見て、勇が言った。

門の前にはずらりと男たちが立ち並び、その中央に例の百貫女、マリー・デボンがいた。

「あわてんじゃないの。そりゃ、正面玄関から出ようってなったら、こうなっても不思議じゃないわ」

恵が言い、シャリーがうなづく。

恵は、マリーに向かって叫んだ。

「お出迎えごくろーさん」

「……ああ。手厚く歓迎してやるよ」

「それには及ばないわ。それに、私たちが歓迎してくれちゃうと、あんたの可愛いお子さんの首から、ぶしゃあとジュースがこぼれ出るわよ」

恵はニッキーの首筋に当てた出刃をきらめかせた。

マリーは一瞬、ひるむような様を見せたが、しかし、すぐに気を取り直し、

「そんな脅しが効くもんかい。殺せるもんなら、殺してみるがいいよ」

「……下手な真似すりゃ、本当にやるわよ」

恵は、一歩踏み出した。

勇とシャリーもそれに続く。

「ママあ、助けてよ」

ニッキーがマリーに懇願した。

マリーは悲しそうに首を振る。

「残念だけど、坊や、あきらめな。私らの稼業にはつきもののことだよ、こういうことはね。いちいち身内の生き死ににかかざらってたら、なにも出来なくなっちゃう」

「そんなあ」

「愛してるよ、坊や。……おやりっ」

マリーの命令一下、男たちが向かってくる。

「しょうがないなっ」

恵はそう言うと、ニッキーを押し退け、屋敷の中へと振り向いた。

そして、

「作戦失敗、一時転進！」

と言いながら走り出す。

勇とシャリーも後に続いた。

三人は走りに走った。

人数のほとんどを正門に回していたのか、屋敷の中はほとんどもぬけである。誰にも会わなかった。

がむしゃらに走り、階段を上った。

また走った。

走る内に、豪華な作りの扉にぶち当たった。

「すげえ扉」

と、勇が言った。

「同感ね」

恵は扉に手をかけた。

ぎいと開く。

中はヨーロッパ風の調度品がむやみと大量に置かれた部屋があった。あまりにも大量に置かれているせいで、おそらくは本来持っているであろう、個々の品々の上品さは失われ、ごちゃごちゃしたホームセンターのような俗な雰囲気すら漂ってしまっている。

「アメリカの成金さんが好きなんですよ、こういう部屋」

シャリーが言った。

「その言い方ってアメリカの成金さんが怒りそうね」

と、恵が返す。

勇が、部屋を見回しながら、

「ここ、あの太ったおばさんの部屋かなあ」

と言った。

「かもしれないわね」

「だったら、さっさと逃げないとやばいぜ」

「そうね……いや」

恵が勇を引き寄せた。

そして続ける。

「むしろチャンスよ」

一条恵は、マリー・デボンの（ものであろうと思われる）部屋の中央に置かれた巨大なベッドの上に寝ころんでいた。

彼女がこのベッドに寝ころんでから、既に二十分ばかり経っている。

とはいえ、だからといって恵はうとうとはしない。

自分たちを殺そうという人間が、この屋敷のあちらこちらにウロウロとしているのだから、流石に眠気に襲われるようなことはなかった。

それに彼女は、先ほどマリー・デボンに叩きのめされた際に、たっぷり昼寝したばかりである。

五分経った。

どす、どすという足音が、ドアの外から近づいてくる。

やがて、ぱしんとドアが開いた。

マリー・デボンと、その息子ニッキー・デボンが現れた。

「こんにちは」

恵が言った。

マリー・デボンは、流石に面食らったようだったが、多少の絶句の後、

「……礼儀のなっていない子だね？ 人様のベッドを勝手に使えって学校で教わったのかい」

と言った。

ニッキー・デボンは口をぱくぱくさせている。

「人を椅子に縛り付けて水責めにすることは学校で習ったのかしら？」

恵が言うと、

「先生に教わったことはないけど、小学校の頃に何人かのクラスメートで試したよ。級友は宝だね」

と、マリーは答え、つばをとばして笑った。

「おっかないなあ」

「もちろんさ、私はあんたなんかよりずっとおっかないよ。……だから、無駄なあがきはやめな」

「無駄なあがきってなによ」

「残り二人のガキンチョを、この部屋のどこかに隠してあるんだろう。そいつらがなにか小細工しようとしてるってわけだ」

「ま、普通はそう考えるよねえ」

「なにをしたって私には勝てないよ。さっきだって勝負にならなかったろう」

「ステゴロで負けたからって、今回も負けるとは限らないでしょーが」

「限る。あんたと私じゃ経験値が違うんだよ」

マリーはそう言いながら、恵のベッドまで歩いてくる。

部屋が揺れた。

「ちょっとちょっと。もう少し警戒してもいいんじゃない」

「あんたら素人がお粗末な罫を仕掛けていたなら、すぐに気づくさ。ここは私の部屋なんだか

らね」

「うーん、そうかな」

恵はそう言い、口笛を吹いた。

口笛と同時に、一個の小さな「玉」が、マリー・デボンの顔面にめがけて吹き出されていた。

玉はマリーの顔面に当たる。

「それが抵抗のつもりかい」

「ううん、挑発」

「はっ。そんなもんにこの私が乗ると思ったら大間違い……」

マリーは恵の寝ているベッドをつかむと、すさまじいまでの怪力を発揮して、それをひっくり返した。

恵はさっと立ち上がってベッドから飛び降り、反転に巻き込まれるのを避ける。着地と同時に、近場にあった壺をつかんで、マリーに向かって投げつけた。

マリーは吼えながら腕を振り回し、壺を粉々に粉砕する。

「あーあ、もったいない」

恵が言った。

マリーは答えず、恵に向かって突進する。

恵は横跳びにかわして、近場にあった燭台を手にとると、バットの要領で構えて、マリーの頭を殴った。

命中。

燭台はバキリと折れ、マリーは朦朧とする。

恵は、

「今よ」

と叫んだ。

呼応して、マリーの「頭上から」五十センチばかりの高さの銅像が落下し、轟音と共に彼女の頭に激突した。

マリーはしばらくふらつくと、とうとう倒れた。

「どーも、ご協力感謝します」

恵は天井に向かって敬礼した。

天井の一部分の羽目板が外され、そこからシャリーと勇が顔を出している。銅像の落下は、無論、この二人の仕業である。

「さて」

恵は、部屋の入り口で呆然と成り行きを眺めていたニッキーに向かって歩きだした。

「お母さんの敵を討ちたい？」

ニッキーは首を振った。

恵はにこりと笑いながらそのまま近づき、ニッキーの首筋を打った。

ニッキーはその場に崩れ落ちた。

勇とシャリーが、天井裏から降りてきた。

三人は、マリーの部屋の中央に置かれた巨大なベッドの上で、方策を練った。

無論、マリーとニッキーは、縛り上げて部屋の隅に転がしてある。

「警察に電話しようぜ」

勇がそう提案した。

「こいつらが犯罪者だっていう、物的証拠を出せないなら、捕まるのはこっちの方かもよ？ 不法侵入がどうたらって話になるかも」

「確かに、おまわりさんは面倒なことになりそうですね」

「じゃ、どうしよう」

一同は考え込んだ。

やがて、シャリーが立ち上がると、先ほど恵がマリーを殴りつけるのに使った燭台に向かって歩きだした。

そして、ライターを取り出すと、その先のろうそくに火をつけ、ベッドに向かって投げた。

恵と勇は、大慌てでベッドから飛び降りる。

「おい、頭おかしくなったのかよ、シャリー」

「いいえ。なかったことにしようと思っただけです。この屋敷自体を」

「燃えカスにしちゃえば、確かに後ぐされはないわね」

恵は肩をすくめた。そして、部屋の隅で寝ているマリーとニッキーの頭を叩いて二人を起こし

、

「火事よ。逃げた方がいいわ」

と、言った。

おぼつかない意識ながらも状況は飲み込めたようで、マリーとニッキーは、立ち上がり、走り出した。

二人は上半身を縛られていただけだったので走るぐらいは出来たのである。

それを見送った恵は、

「私たちも逃げましょう」

と、言った。

勇とシャリーはうなずく。

ほどなくして、恵たちは、屋敷の敷地外へと逃げ出していた。

燃え盛る屋敷の炎を遠目に見ながら、恵は、

「119番、誰かしたかしら？ 屋敷の連中は、逃げるのに必死ってところだろうし、近所には人家は多くないし」

と言った。

「この辺りは人気がないですからね。意外とまだかも」

シャリーが答える。

「死人と延焼がなければいいんだけど」

「相変わらず優しいですね」

「あなたの優しいの基準ってのもおかしい」

恵とシャリーは、そうのんきに言いあった。

それに勇が、

「まったくだぜ」

と口を挟む。

そして、

「シャリー、さっき、頭がおかしくなったんじゃないかねえかって言ったけど、あれは訂正するぜ。お前と恵さんは多分、もともとどっかおかしいんだ」

と続けた。

しばらくの一同の沈黙のあと、恵が言った。

「ご明察」

翌朝の朝刊の地方欄に、町外れの屋敷が不審火で全焼した、という旨の記事が載った。
死者は一人も出ていなかったようで、扱いは小さい。

「ついてたわね」

万年床に寝ころんで新聞を読みながら、一条恵が言った。

「ええ。あの人たちは、悪党のくせになかなか幸運です」

そばの畳に寝ころんで漫画を読んでいるシャリーが答えた。

「そうじゃなくて、私たちがよ」

「私たちが逃げられたのは、別に運じゃないでしょう」

「いや、なんつーか。殺しをしないですんだって話」

「ああ、なるほど」

会話はとりあえずそこで終わり、二人はそれぞれ、新聞と漫画を読むことへと戻った。

しばらく経って、恵が言った。

「彼氏とはどうしてる？」

「勇くんのことですか」

「そう、それ」

「学校では、まあたまにしゃべりますよ」

「仲は進展してないんだ」

「ええ。少なくとも、またデートに誘ってくるようなことはなかなかないです」

「やっぱり、引かれちゃったんじゃない。あんた、正直アレだし」

「頭がおかしいってことですか？」

「包み隠さずに言えば」

そこで、チャイムの音がした。

「宅急便かな？」

恵は立ち上がり、ドアまでどたどたと歩き、開けた。

「おはようございまーす！」

元気な声を出したのは、ドアの向こうに立っていた少年、柊勇である。

「あら、勇くん。おひさしぶり。なにか用？」

「シャリー、来てませんか？」

「もちろんいるわ。待っててね」

恵は中に戻ると、

「彼氏よ」

とシャリーに言った。

シャリーは立ち上がり、

「彼氏じゃないです」

と言った後、ドアに向かって歩き出す。

恵もその後続いた。

シャリーは玄関先で靴をはきながら、待っていた勇に、

「私のこと、頭がおかしいって仰ってませんでした？」

「今でも思ってるよ。お前も恵さんも」

「そんな私をお誘いになる？」

「そんなお前だからお誘いになるんだよ」

勇は、靴をはき終わったシャリーの手を引いた。

「行ってらっしゃい」

恵はそう言って少年少女を送り出し、ドアをしめた。

布団に寝転がった。

やがて眠気に襲われた。

静かだった。

蝉の声はもうしない。